

仏の教説とイメージの変容

立川武蔵 (愛知学院大学)

わたしは『仏とは何か―ブッディスト・セオロジーⅢ―』(講談社、2007、pp.1-2)において次のように述べました。「初期仏教においてブッダはあくまで人々の師であり、人間以上のものではありませんでした。大乘仏教においてブッダは、崇拝対象としての「神的存在」となりました。「神的存在」となったブッダ(仏)は、仏教徒ひとりひとりが精神的救済を求めようとする際、人が「交わり」を有し得る相手でもありました。「交わり」あるいは対話が可能であるという意味において、阿弥陀仏、大日如来などの大乘の仏たちは「ペルソナ」(人格)を備えた仏ということができます。浄土教における阿弥陀仏は、師というよりは救済者というべきでしょう。」今回の発表では、師としてのブッダから崇拝の対象であり救済者でもあるブッダへの変容の歴史をどのような方法で理解すべきかを扱います。

そのような変容は、実践形態の観点からするならばヨーガの伝統が存する一方でバクティの伝統が新しく生まれたことであるといえましょう。仏教では「ヨーガ」という語も用いられますが、「禅定」「三昧」といった語の方が一般的です。しかし、ここでは汎インド的概念として「ヨーガ」という語を用います。また「バクティ」という語によって阿弥陀信仰を指すことには反論が予想されますが、ここではヒンドゥー教のバクティも視野に入れて「バクティ」という語を用いることにします。

仏教の実践・崇拝の形態はヨーガとバクティとによって語ることができます。インド初期仏教(紀元前後まで)における重要な実践はヨーガでありましたが、中期仏教(紀元前後～600年頃)以降はヨーガの実践に加えてバクティが重要な崇拝形態となります。また、ヨーガとバクティの両者はネパール、チベット、中国、日本などの大乘仏教にあっても主要です。例えば、日本仏教において「ヨーガ」を実践する禅宗と阿弥陀仏への帰依(バクティ)を重んじる浄土教仏教が有力であります。

仏教においてヨーガは大きく変容しました。初期仏教ではヨーガは「心作用の統御」を目指すいわゆる古典ヨーガであったのですが、中期では「現前に仏を見る行法」(見仏)や「仏の異なる位態」(三身説など)と呼応するものとなり、後期では、心作用を活性化するヨーガや「仏と一体になる行法」(サーダナ)などの密教的ヨーガが重要になります。

ヨーガとバクティとの関係は経典や学派によって異なりますが、その関係はいくつかの操作概念によってより明確にできると思われまます。仏の図像学的イメージの変容もまたヨーガとバクティという2変項の関数として理解できます。さらに仏と仏国土との距離の遠近も帰依(バクティ)あるいは瞑想(ヨーガ)の対象と実践者との距離と関係します。このようなパラダイムによって仏の教説とイメージの変容を考察したいと考えています。

キーワード：ヨーガ、バクティ、浄土